水衡石

拾四

14

6940

△澪標十一巻 十四冊目 花鳥云以歌為巻名源氏廿七ノ十月ヨリ廿八ノ八月迄ノ事有廿七ハ明石ノ巻ノ末ト同年也ト云々八月迄トアルハアヤマリ也此廿七才明石ヨリ帰京ノ歳ヨリ廿八ノ十月迄ノ事可成廿七八明石ノ巻ノ末ト同年ノ事ナリ

△サヤカニ見玉ヒシ夢ノ後ハ 花云源氏古院ヲスコシテ三月十二日ノアカツキニ夢ニミ給ヒシ事明石ノ巻ニ見タリ寛平御記云寛平元年九月依以夢有被行以八講先帝遷化之後法会子細加当ニ果行之即位意趣猶不勤此事可謂不忠不孝甚者也云々先帝ヲ夢ニ見玉ヒテ以八講被行ハ此巻ニ云ルニ相似タリ此先帝ハ仁和ノ御門ヲ申也ト也

△イカデカノシヅミタマフラシツミニアカシノ巻ニ古院ノ源ニ告給言葉ノ事也我ヲカス罪ナカリシカト、云末ノ事也

△カンカヘリメニイテハ源氏古院ノツミ有ト夢ニ告玉フヲイカニシテカスクヒ奉ラント思タルヲ今帰京ノ向先此コトヲイソキシ給ト也

△さやかにみえ給し夢の後は院のみかとの御ことを心にかけきこえ給ていかでかのしづみ給らん罪すくひたてまつる事をせんとおぼしなげきけるをかくかへり給ては其御いそぎし給神無月に御八講し給世の人なびきつかうまつる事むかしのやうなりおほきさきなを御なやみおもくおはしますうちにもつゐに此人をえけたずなりなん事と心やみおぼしけれど帝は院の御遺言を思ひきこえ給ふ物のむくひありぬべくおぼしけるをなをしたて給ひては御心ちすゞしくなんおぼしける時々おこりなやませ給し御めも

（アヤマリテ貝スルヲ原シテ位ニナヲシ給ト云事也）

さりやさらぬまと大かたこそふえなかくはるまじう
んかう事とのみひきしめつゝぬるとをおほし
はつるにめしあわて源氏の君ハ宮わたらぬ世中の
すなどもなくてなくのこまりきなからしはて
はかなのやうけまたおほりる此よ此人もあいなく
うれしきうにまなびきえくらがうまぬなんの
はつはるひらかくなわめてにもかゝしのうちえのみ
かうげよし我思ひふけききらへるいと哀よおぼされ
きれおもしう若竹に大定もたのりしをなくのこ
なわらへるに我世の御わびくな義んちりるになん
いとくあしう名残な義さ御しそとまわらなむせ

はらんぜうしまわ人わいおりひおとし竹へまと
若はうる此あらさまざしのまなきなうひにたゞは
すのゝなむ宮在り覚え老后たちまさは人又かい
おわてみさま人ともおほすおぼつぬらうさしりも
あすうえさうむと思さんあうあはしけまとてうち
なき給ぬ女君あなにはいとあさ座りはひてあか里
げるわ此何いきやうすゝて派もこぼさぬる我よ給はの
はんわすまで君にらうふしとはらんさうなとよ
みことさもさまはるましおくちわしうもわ后
うれしちまわふうき人見あふはせかいて給らん堂
おりふもくちかしやあまわあまはたゞひとにはさう

かんはりんうしなどゆくすゑの事をさへのこ成
それとはよいじしそばしうもあらしもおぼしはふ
はかなうちなどな海めりうきょうにてかなわなき
は心ざしのとし月よろふやうにもてなさせ給ふよ
めて美人な遠心さしを思へ難さわし登しまん
まくなどもの思ひまつる遠所ふまでにかどて我心の
わのをいそけなまりまのをそてさはさはぎ残さん
ひ義出て我な残ばさうるもいひば人花にためさん
などおかし出ぶよいせうきはかなわおもはとしの
春さうきよ書色乃はなんふく乃事あわ十一月
あわ給へどあとまわかが春りおとあしうきます

ゆくたび源氏の大納言のはかなき波よふくはまうは
しこかんやうよみえ給いとまのばゆるまでひうわ
あひ竹んはをよ人めでたふもれよきこゆ遠心さて
宮えいぶんじうあふはうりいる春事にあひなく御
心をばうし給うち小もめでたし心ろみそまはわ
給ひて世中ゆけわゆえ給べ義事などな侍りしう
春ことまうを給はふ一月乃廿日はかりゆつわ
の事ありまうあまてとおかききはきおぼしはまそ
うわうひな義さ海なげうものとうふはらんせらは
べき事を思なわとうず写へなぐさめ給ふは坊小ば
兼香殿のやさし并給ぬ世中あらたまわてひきうん

兼香殿公の姫君ノ
娘ニ三位ニ…
ノ妹朱雀ノ女也
ワカナノ下ニテ失給
ハルゝ後ハ三位ゝ

或云天智天皇八年十月十五日以内臣大織冠藤原内臣鎌子初テ内大臣ニ任ス其後此臣久絶タリ至光仁ノ御宇永手良継魚名不任之初テ次左右大臣ノ下令外臣ハ左右ニテウナキニヨリテ内大臣ニ成左右ニ加リの給トし

左大臣職仕ノ一柳巻ニテ見タリ花云天皇御元服ノ後モ未幼主ノ時ハ摂政ト是ヲ云後辞表ヲ奉リテ君ニ政ヲカヘシ奉ル後ハ摂政ヲ改テ関白ト称ス冷泉院十三ニテ御元服アリテ則此位ニ即給天子元服後受禅ノ向摂政改例ハ清和天皇貞観六年御元服同八年九月忠仁公良房摂政ハ沼ヲ蒙ル此例ニ准スルし六十三ノ年齢ナト忠仁公ノ例ニテ不違トト〻深メ左公ヘユツリ給し

人ノ国ニモ是ノ如人一日ト云詞し　花云高祖戚夫人ヲ寵シテ其子ヲ太子ニ立カヘントセシ時呂太后恐ウレヘテ張良ニハカリシコトハシニ父子ノ間ノコトナレバイカントモセザルニ但商山ニ四皓トテ四人ノ隠者アリ高祖メセドモ来ズ者ハ是ヲ太子ノタスケニセヨトバ高祖モシモヤ思ナラリ給ヿアリモヤト張良カ云ニ任セテ四皓ヲ召テヿノ狐ヲ云ツケテ高祖ノ前ニ朝シ玉ヒシカバ高祖大ニ驚テ羽翼ステニ成トノタマイテ恵帝モ本ノ如ク太子ニチカヘラレザルトゾし　史記ニ高祖向云彼ウル者四人輔之羽翼已成難動ヲし　姓日遠公甪里先生綺里季夏黄公上鶴云羽翼已成難動

とめりしきうりどもはうわ源氏大納言内大臣小
なわ給ぬ数さまわてく法ぐ所もあかわけ遠ぞ
くはつ里給なわくわ座りてちのまはわじとをし
給へ義なきどさやうのことしげく職しくてりしさへば
なまとしてものこのおりにをつきやうさ給へる事よし
ゆばわやきがふやまひよわてくぬもうへし
ふてまはわてさらいふくたれば法はもわうひてぞうの
しきうへらじとうけひ義や給りけん人のく
めでもことをはう世中さいなあらぬいかにもうき義
山にぬんきたまふ人にたよもおさまままほよしはよし給
うえをもりけいできんのえとこそぬこゆゆうの

梯巻ニテ久中イニフタギノニケワザノ時ハ八ツ九ツニテ多例ウタヒシ四ノ君ハ方ン次ヾし君モノモ字ニテ兄ノ右モウイカフムリトニタリ

ひし里ゆれいしたれやまめひり志づのえそうへし給
老法くうぬた世中うおまそえおうためりわもり
さうりみとぞのおぬ法まじうおんや老まさへしとさぎ絶
うさぐ法たねしもわかれぎすまひ給てぞ大臣太臣
りうわ折ふけとしわ六十三まずなわ給世中すさ
まうしさうよわりはいこもわ丹給しをとりうえん
しうかさ義折へいはことをなとしはむ座うり
物志給へふとかうひ給とわわきて宰相羽
経守納言になれ給ひの四君の法りうの北若十とふ
なわ給を内よなるきんとうし法よ給みれたるさこ
うたひしきとおうふわせききういゆいまかりしゆう歳

上ヲハ又ルナハゴニチウ　ミニチウト
ニゴリヲヨムトナリ

なかりしくにはことものとはまことにまさりけり
おもひなしてはさよきまことしげなるを源氏の君は
うちやすみ給ふ大殿にしのわか君すみはしとにうけはりし
うて内侍のかみの殿上し給ことひあきこのう給へし
あけきを高かくまもさすりあはれにあてをかし
なげくされどおほきぬ名残もたく世おもしろの御
ひめわかりしも給はぬてなされ給てとしころおもかし
こぼこはるなごなきまでさうへ給な殿上はた心
ちへかりしばおわかしことにかわり給なとし
はづまの君の御めれとをさりぬ人もとし給の新
ぬのぞちらぶわかるたやへなさはべきことあり

つくづくはかはりんとするかなかしとうさはいまさに
またい人おもくなわぬへし二条院にもおもなしごと
ますきこえ給ふ人をはまれ給ふにおかしてとし
はのむまあくばりわとおがをたげぬ中務やうの
人にはなどくよつをはなさけなみし給よは
いと悩みくておあわきまもまりば二条院のめん
しなる意院のたきうみむなわし殿にもなくあら
さあはくろを給花ちる里などまろみれ心ぐるし世
ひとくはまさんなどおがしはてゝはくなすき給
悩ことやうみ給ありりんがうしけなわしう
いうふたるもがしまはなく時なけまどおかやきわさ

くらゐゆづりおはしまさりえにおはしましてものしも
ちひさきはいさゝかく風情ありて月けしきのほどにはやゝと
おかしかるに人ゑあはれなりしはかなきにほひともにとく
かくれさせ給てまた十六日になん女みこたいしうまれ
し給ひき御産の御めいりしきは給へるまてさらにあ
なるをおぼすにまほりのならひおどろかれすることのへて
あはれなりともをとまふ御さんはさらにかなはで
さは宿耀りみこ三人うまれさせ給ふなかなるなりぬべき
ひそかにまゐりし中のおとどをたいせう大臣にてくだりぬを
きりはなたるしけりうんのへにかたは中納言なとなりて
めでたきさまにまうしとおほしたりけるとはらして

うちにはわかおかのしかれそれさきくて弁よのかが
世継まうさんとおもふことはさきらかにこうまし
あまたのさう人なのたまこえあるめてた給へは
世にかくらりしさまえらむおはしけちなるとう
たいのうへくらゐよかたひきめてたき事をおもひの
ごとうれしとおぼしめすかたたちてまふれ給へは
すぢはさらにあはれましとおこととはおぼしはまうさむ
みこうまれなさせはかぐやそらうたまえよおぼえ
たかしうおぼえたる人のおなじまたてかうたう殿を
おのふよすくをと殿ゆわらなうちれかくておもし
まはとめてたみひとのきこゆる事なん殿とはる人の

うむなしうしばとほんのうちよそがしかはりま
ゆくすゑのおほしきことをおぼしめしもの
御のさはへまことにかのひとことふかなへてなりぬ
すくせめでひがくしきわやもをよびなきんを
ほのふまやあわきんさはまそいうしましたちにも
なほへおん人はあやしきをうひまでむまれさせんに
いとおしうさしけなくもあはべき御ことは維
ずくしてむかへてん此おがしてびんりしか院
いう事はくはべよし御かたを所ばらぶなりけり
ものさき人さてもわがさうむをおがして吉院に
さぶらひしきんじ此むさめ宮内にの事おもて

なくなりにし人はこなわしをばなどもうきそて
うれかなる世なりへ所がそのなきさはまそこう
ゆんなわときこしめし給さしるなさるゝわあわて
あと此はぬそかりま御び義ことかは人めしてさは
べき義さはよの御ち尚ぶまわかくなはんにもあな人
まそはをられ人さまぬはげうやなりなかせるさる御
おうさなまがふあかうも思ひたどうは此ほわふわれ
ますをひとへにめでたりおりひゆきてまいはべき
よしやうをさわいかほそ御なり川を御ほししして
いたしたて給ものはれぞよみりしうち思ひまのまゝて
おりしまいなわさはゆえながらいのふをましと

思ひ遣るにもいとくるしきをなかにもよろづにあつかひ
なぐさめてたゞのくまはきこえましかと我ゝ思ふにも給
し幾日ながられいらずしも侍てあやしう
思ひ居わなきやうなる迄も御心ざしことなる事
はさなん有ばかりもおかしく、ぬほまぬよしをほくれば
ふわしためしとおりひよりつへて志ばし侍んど
物へなどこゝろとのおはしまつりしうらひ頃うへ
乃宮ほりへとおぼしくをしうばみ頃おわもあはしを
いとうおと頃へよりわ家のさぞもいひしらばあまた
まどひてさはがしな御ほきなるとき頃のこたちなど
うとましげよいうそですぐしはべるむところの人さぞ

わかやありおりしられぬはらんしかなたまはゞ
心うく侍る遣の頃て、とわかうへしつべきんち
あうすまいつのひとの頃に侍きてもぐまおあしうい
御方ちかうも侍つうまはわかなまばうき方もなく
さらんかましとやんさそてま侍る。
うけてよわ宿ぞてぬ中となりけり心ばら別は
おしき物よりわか老居きさひや侍ましとの頃へだゝ
うちわらひて
うちつきのまいれとおしむかうしゝかて思りむ
おきふきさひやいきぬかまてきこゆるといふしと
もがは東山そ京のをといゆおもふれなはいと

三条院皇女長和二七月十六日降誕即日被奉御剣

志はしきのとさうらんさゆめのやうにてましゝてくち
かくおほえてけりけれえりしさへきものゝなかに歌
をききまてあかり屋ぬくなしめせとてもあわ
うちに屋のてらいさりとのほとおきのうず
入道ありひりしほさ思ふらんはわか思ひ屋ふも
ほにたまれ給ふおかくまさ見りし心とゝ行哉
たゞ此事の清んふかゝるもあきうゝぬよのい
清めこ小もそ給のふもてなし思ふまじ此为こ
いはむすかめ此人を
いはしゝも袖うちをかんし女子が世をつく
あはれいはのれいけきばのをゝまてはあまてすれ

よろはなくそむまてい?り給はぬ入道まちとわ
すなうひりしこまはきこゆかんるはかしうそこよ
むきそをとうえやみえておはうごきけんたゞ此思ふまに
いよくいるはしうおうなりしきまでありふちこの
いとゆしきまで見ほくしうおほけるうゝたぐひ
あしきやうしこ殊に清心小おしばよ殊こえん此さ
おかりたるい世へなかくわとみえてまつ尓よおや
しきみちにいそぎちて反此ちもちしけるあけ
きもうあにくわいとうぼくしうらうたかおわして
あけのひきて遊ごものゝ君も月ご給りのたはりて
おもひ志はかそいとゞよはまさんちよいきうらん

とも覚えざらむはかなさ此君をさきそのすゝし御思ひ
なぐさめらるゝゆかりもなくてはかなき人も
みな義さ殿乃志族さし哉ほくもとく家わなんとは
いふ義をさしかまでも思ふらめどもはらしやうにて
ひとわしてなほるゝ袖の雅なほ小思ふりわの
まけまうまほしげなるをたわあやしきまで侍ち給よ
うし給ゆしうおほさ給女きを小性しとありおる
りてなさく家し給り然をきてあまを給すを
ちうとおほしてさらあんなまあやしうくちげ
ふ給わざなわやさもおほきをなむど思ふあたわゆれ
心をとなくておもひ乃かりのよくちおしきなん也

みそ侍なきは此ところも此志けまたつきまでも
あわぬべきさしとなまめさはえ思ひつましきわざ
なわきわよひみ座わてみをとそまいらんかくこ給
みよときさえ給へどおりてうちおまみえそお座う
つきにうぬかうおるすぢ乃給侍ぐるん此雅ちうわま
なぐうとましけまた給ふくこはい何なるふべき義よ
うきえんし竹へだいとよくうちゑとて十分よふう
なるはしかりあるむおもりけやすみし給やん人の
ねうわほりなる思ひ座わとしても此えんし
なとし竹ふよおもへばあなしとそえそくいに
かへたまふたし侍わうひうひしとおもひ我さえ

語しきんのうちどもおほく消息のかよひなど
おぼしいはるゝは須磨のすさひより
ほとと思ひけれは折ふし人をようまても思日数
ことしふるきな残思出乃侍るうきのことさまよきさこえが
まさひかから語え折ふけれはとの語さして人かしれ
おもしろきもとゝ語りつゝのめ侍らしゝうおもし
きりし花どかくろやうし語ゞ侍れなわしゆふへの
夕かわりひし事に心らまかてら絹とおのよれ
おもちなれえしこと比の乃に成めきたわしゝえ
すべてんとまゝ遣さ成よの語いはるゝに我いみなく
こゝうるしと思ひなけましかすさひまそも心細

わ浅語久んまとたゞなるゝ思はほど巻しまて家ん
まれ心らうちうむまなりめて数なわしよれ有様
うかととひとわかこと比やうふうちにけきそ
思とちにひくうらまはあつれは我すけかわよ
さまさたちなましなまとうやこ語うや
たまさかのよわたりを海山よりめくりわたるぬ波に
うきたつ川むかひいでやいかでかみえ侍らん侍ちう
うかひかゝ寄ものなかめまさりなかなか事まそ人り
古語をうまじとありふをたゞひとりゆくへかやとそ
さうの御こゝろひきよせて表はりをすさひ語て
そのりし残こえ折ふしどうのすくれなりきんも

まことまゝやても重ねりはにはかにかかるうかうは
くしうたなやかな路へふも此うしさはうふせうのさき
んはぬても此染むしまてさまへ御が中にあいけ
ほまてりしうおもしかをおうしうみとも衣あわと
おかはさ月五日うつりのはおさなくんと人きまほ
かぶん路てゆりしう変ぶおかり座わはらともいする
うひはるさ衣よまてあしうれうしましは御しの
わざやさふとよ衣りしもきう衣く衣しおさ衣めそ
いできたるよ叱おはほおとこきとなりましうば
うう志もけんしよりけ路まし美成がつけなういと
おしう歌御すくせものはるかりつきてう

なわりかはこおほさるゝ御はうひいさし
ふそしなりなるゝもる此日たいへまのはほ緑やる
のさまへたかは白よい義はほぬれほし座候ゆる
おわかさうめでたふ衣にさまあしく志やき清とふ
らひもあわ
うえまほやとふぶとなきうけふぬてなほれ
あやめもいうまわくしんくのほくかなくますでなん
衣我かくてはえほくすましき我思ひふち路孫さわ
ともうしはめるまおとはるもかうい路く里へ入た
倒のよ衣うひなましてかう ふおしはかわわい
いくはりひもはくわいでするとりわおわとうゆ

家にも後見まで思ひまうけたりけれども
はかひなく宮このよにてあらくれぬへうおはしけれ
あれとも、これ女君のはに移りありふやうなるを
からひ日比まてよれなくさあめりくわかはさく
なとらぬ人もおいありきてもうひとりてあしきを
まどこよなくおと様へするえやはらへひとなとの
いはかれなりうはめあかおちかうまま母などとう
あまご遠いこよなうこあき物ひあがまわきて京
あはよの物語などして、おとゝ、此君乃はかなきま
ちにかしはうれ給へるはかおえのやども母んあよ
まうきてはなくうるさはくさばくよきうくおぼへし

いはたかりわれおとろへぬめる御方もいかにきけく
宮うく思ひなおかくわはしこもはとも上人そん乃
うちよ忠かうようち思ひのかりのよめで五歳すくさは
あわけまうさりのハ我か有りちうはわけまかう思
はゞけら御まとめ此との事をいすふ本かくこ御
すふとふくり給ひ給へ御もうてけなくあよ事か
なぐさめかねはりへしみは
うれなうぬえしまかくまよ間ろ祇をふも
いふありとかふ人あふよ後見有り思ひ給へむを
ほゞ御ほかはまとうくたまさうのはなくさめに
よけ侍るいのちのほとをまたなくなんさまうし侍

いみじく思ふ人々をもくはしきもうちすてまめ唐よ来こえ
させ給ちゝへしみはつゝましけれなからなかなかやゝとく
ひとわたち給を女君さはめに見えこきてうしろわ
きちりこく…のとものひ唐よりひとつるにもち
なりみ給ふをゐことはかくまでとわかし給よには
たぐかはばるのはる道ぞや雨の…なとうち思ひ
唐ふとおくまゝのことわきまへがらき白とも
おとをようきゝすくい給りてなど心見まゝに
給てうけはゞみなかりをみきちたまはゝを給ふを
なとりいもゆへばきて唐むじとかなひとく唐しけ
な唐をかくまばなめかとかげをかくこの御世給

とわ給などに花ちる里をつまどひて給めるよりいと
おしかれおもはやぎごとどもまじげく承りき御かたに
おかしきさまのまゝよたへてもめづらしくはめおもど
給く事のな義給思ひしば見え給ふなめり五月雨はれ
ばかりなること給おもはやぎわたりし物忌ばかりなるに
おぼしおこしてかゝわ給へまゐらすなずらひもはるに
くれありつきてよ河陽県にながし唐わとつゝ入給を
たゞのことしてほぐい給としろ…道ばいまはめかしう
この給かくおさ給まうせしかえ給ふべきはまた心
唐のきさきなまわたしこなりいよくしは道にさかすげ
まておりに女流の君は物語給てよしのば

とよ明かりてたちまちにぬへ思ふ月わびしかり
さしいれてゆとゝえんなる御に御まへひつまをきゝ
えゝ給ひとくはゝましけまとりしちやうながめ給
ひ御さ御かげりのと座りめて物し給ぬひいと
めやらしきのなのはちうなきたるを
きみ井姉がまおもと給の宿もいうてうへあれ
さ御座とよ月をいましいとなつかしういひ
けもゝ給へ御かとかくふかくそでさき世かれが御
ちう中ゝ方もくらしけまかゝる和がれ
ぞしなべてたゝきゝぬなまおと給りはうちの
うら御御ばよきこえいまらし給めすりかゝるいあを

次ノモニテ行メグリワイニスムヘキ月郭ノシバシノモウシニ元ナナカメリ

源ノ花セニ内ハ花ナルノ一ガノ乳ニナケキシニ西京アリテモ対面ナケレバウキ方ハ日シートヽ

ことり宮へ給へどあはれくしきこすおなどうら
がはしきほこ旅まへまをゆらば年はまちすぐし
やそ妙へぶもさらふ御旅り山里おがされざわりくも
そらなすげあそとと見めやそ緒しおもひこともも
の給出そ給とてたぐひあしどいうし物を思ひ
まだ院ほりんうきこゑかゝいなまし御げかしさり
こ秋との給へ御もおいるうらうすげなりわまりれ
いばえも法言井葉かのあらんはまをばうらひ
なぐさめやそ給がやうのつ井てかものゝおきもちを
おがりしわすまはまりかそしなとこ旅みうけ妙へ
まどいかしりしときうすそえまの秦れ給りは女物思日

たえぬとおぼやいまはべりにおもひいでたまふをおほきおとど
よろこびへんをおもひさんたらむたまはんきとのはべらね
しては(ら)やうれひとつどへても思ふさまにかし
づきたまふべきまじき人もいでまゐりはべらずさぶらふひとの
うしろみもなかりければ院のはべるまさぶらふ中らく
かんとうはらはらくいまめいうちわらいあはせずらうなどは
えあてあそくにもよかりけるもりのぬれ君を
おもえ思ひなふち我こえはりければまゐらちりへば
御ともはなへもはまかせにし女いうなふう所で昔の
ながらものひまぬへ奏聞はじ中くまさう
きうくをさ世中おぼさ院いのど座かまおはし

玉希ん　人　綏紀ノ　二条院　昭陽舎ノ女御中宮ニシタテラレ　アヤ　安紀イ　作ラヌシラ作付　両説原ん出カる　女ん院ん前ニアル云　朱雀初テ院ト申ス又

なかでまかりしくはつまでまかりし御はしひなど
これましけるおしまほど女御更衣あまたの例の
ことさらひ所へ心に春宮の御しなく女御のこず
とものたてくとききめききはすもなくかんれきえの院
おぼえになりけたまはりまへまいりすくひ奏たずん
めで奏清さいまいそりれまいでて宮よそひそそ
まかわ所へおはしてこの清とのぬかいむしりの
さばいさなるなしばかり春宮いれさせまをせば
ちらどなわの院ちはすをありなますなも我こえ
かまひてぞやなもうはままわる入道ささらの宮
はくしろぬ我みあしたあ所べきなすとかが太上天皇よ

是ハ朱雀院位ノ時ノ事ト云　承香殿　アヤ　係　イ

桐壺ハ小ナシツボハ南
女御春宮ニソヒテル院

花山女院モ三ル位三
ワキ玉ハテ院二ナリ
給ハ一条院ナドラバ
太上天皇ノ名号
トハヤ乃ラズ但封
戸年官年爵十
ドハ若異ニモナケレバ
ナズラフルトハ申侍
ナリ此封トハ封戸也三宮ハ各千五百戸ナルラ太上天皇ニナズラヘテ二千戸給リ玉フん院司ハ女院カタノ一ツカサトル
判官代主典代ナトし

天子ノ母 太皇太后宮　國母ヲ 皇太后宮　天子ノ妻ヲ 皇后宮 中宮

院司ハ 判官代 主典 武者所 仕所 別納所 御厩所 進物所 右ノ司〻

河云本朝ノ太上天皇ハ持統天皇ヨリ始ル女帝也
東三条院詮子以後ノ例十八人今ノ
女院ノ名号ハ持統天皇ノ例ニカ東三条院
正暦二年九月一日二院号依為國母也

なほらんてこふさまのつかさ院司どもなかわてさ候
ことふりくはまこなひまどくのうをつくれ
はいかなるにそおはしまはとしは世よそうかはて
いでいかとりさくみさそまはかはり無をいふきまう
おかしきはにおぼせはまるて宗かは隣りて侍もいと
めでたくおぼおぼ弟はききいつきまゐれいよなかきわと
おかしきおかげくおとゞはことよ申ていとまうし
かまはつまはわこ侍よせきて定めもなかくいと
おしげなる人よ座はうしびきこえなは兵部へ
のかんこと志侍のはんかへ乃はらくおもひはまそ
たゞよれ中をの兄おかしきさうかはし中宮を

おとゞはうき物よおかしきをきそむりしの座にも
むすびてさえ侍りけるべての世にはほまことくめで
大夫清んなまゐとしおたはは中々なさけあまふかしな
うちまぜ侍る餞へ入たれ弟をいひもおしうかいなま
あとありしたそまほ里侍せ弟のことたゞなくなを
かきておかききおとゞれおとゞ乃侍まうしなわ権守
納言のはむとむられとしの八月ありまゐるを侍
和田ちおとゞぬたちてぎしなどいとあゝまかし
兵部ぎれ宮の中乃君もさやうよんぎうしばよ
侍るふりきをおとゞいひをよわまさわ折へとしも
おぼさばなんあわく成いつぞ志侍りんかゝすらん

さ此歟すみよしにまうて祈ともえよし祈べくなんなれ
いつかなしきはあはれなるて世中ゆかんて上東門
院上人我もくとはつかうまつる祈おもしろしもの此
はしの人としおとのまゐれ此事まてはつけけるを
おとしさする事わかれさことわくあらしこ
まわとわおさまて思ひつちくわ毎まそてまうでこわ
きしよさしはする祖みまへのくちわてまうで祈
ひとのきりひなさよきふみちていはれしおもうんだ
かるをりてはくきたわかくく人のこゝろをつくるなんはり
うくを調へかくちとえるひさわおのまうで祈つる
かゝとふめ度へいは内大臣殿乃はべる祈るまえて

絶なさるぬ人にあはれきわとそりのあさかとのかは
だなんちかだようちわるふげよあさましき月日も
こうは道中くこ此はわさ海をはるうまえて
まつは小身此経くちおしうおかゆはきおふうけ
えられさてまほらぬはくをながるつく日おしく
きえのも此ずる物思日あげまそはつうまはるを通
おしよおりひたるりなをのはとふの義子まそ
こ後ふうけておばはつかう思ひ我とえはくかしき
たはちひのきをもえるてきち出はるむなど思はず
かるりいとよきしうてひとえまばえにたえ道なれ
松原のふかみとわなる中よ花もみちをこ義ちらし

一位ハ深紫 二三位ハ浅紫 四位ハ深緋アケノコトシ 五位ハ浅緋 六位ハ深緑 七位ハ浅緑 八位ハ深縹ハナダ 初位ハ縹 青白

役賀茂人ハ……
ストン巻ニテ引之
テアフヒカザシノ
カミシ思ヘハウラシ
カモノ水カキト
神ニウラミテヤ
ショミシ花云
私案院ノ御ニ員
ツトメシ人ハ源氏ノスヘヘウツリ侍同ニ礼ケヅワレシガ内京後本ノ位ニ復テ今
随カナトアクシテ此物語ニワカウニコレルトド麹塵ノ袍ハ武官随身多召連之

なほとえんゆるうへのきぬのこようはきうはしるきに
六位もしも中小も殿人は何の色とるくみしてはかもの
まつりのきさうしに右をれさうもゆげいなりて
ことくきげおもるほかぐしたる殿人なるよし

麹塵ノ袍ヲ青色ト云
ユゲイノ尉ニテ六位ノ兄人シ兼タリ

きよもおかしすきまて人よおかしともえ思ひおもき
くしおもそなど殿くしきおもきあすがさいかし

源少納言良清ハユゲイノ兄人ヲ兼ケテリ 五位ナル故赤衣姿ト注リ

きよげなわずべてしんてひきうへよかたわり
なよりおりふらんさえみえてうちてまうちにわか
座かなるよ童部なと人の我をくくと思ひどもみむま
くつなどまでかざりわかとしのへんがきもまのへにい
いとしこさえりのよぬ中人もおもへるを深車我うら

カハラノ大臣 花云長徳二年八月九日内大臣 辞左大将 同日以童六人為随身三年十月九日勅賜左右近衛府生各一人近衛各三人為随身但停童
河云 河原左大臣融賜童随身事 所見未勘 出中右記云御堂入道殿今賜童随身九条殿例云々
今案童随身ミヅラユヒ紫スソゴノモトユイスルヨシハ見エタレド其装束ノ色目可見ナシ水干ノ袴カリギヌ以ルベキヤ随身トイヘバヤナグイヲヲフベキニヤイブレモタシカナル説按ヲ又傍ラスル童随ハ六人トミエタリ
此物語ニハ十人トアリト云々 花ニ無不見トニ云リ 融公童随身ノ事国史ナドニモ不記 其事如此ノ事ニシルサヌ一モ
可有此物語ニ手ハ 異云河ニ鬼作云ノ例童随身ノコトハ
剣ノ支説ニ云六禅ノ
此説ト云花ヲナノ随身トテ袖ニ作花ヲ付ルト云々 細流ニモ右抄不悦 但此物語ニ手上ハイウレナキニハアラジト云々
弘安ノ源氏論議ニモ此不一ツノナニギトスル

うふやまいさしのまふしくてこそしみきれ
けるとえみさてまいらんかいしくのおかしき
まらとすのひそわたしらんかかんたよいりわ殿きる
いはもおかしけりさうが義かんはゆひそむしささき

カミヲ角ヘ分テ 総角ニ見タリ

すきこのもとゆひゆかめあしうさけすがると

紫ノモトユイノスソノコキナリ

のひうはくしけふそずた人はまゝとふ今めりして
うめおかとのりゝのまのきえんかざわなくうしぼか
たてくむまぞひわうつのおとえ飛ぼくわあはきて
座うへてはうが義わ巻たね雲井そうるふめんべ

夕方ノ行ギリ

さくこゆふうは巻てもわの君のうはなりぬに座

アカシノ帰ル

まて能し路ふをいらじと思ふいよく兄やさし殿の

手向ニハツヅリノ袖モキルベキニ紅葉ニ飽ケル神ヤカヘサム

うらをたのみ参らせ候へは此のみ宮にて御まうけ
例の大ぬさなどは宮わたりわいうにはなくはうう
まほまわかんしとりしあけまいらせまし
思ひなるぬ身のいのりすれまきんり神も
たいまつりはまん給へ義にあらびのへらんなも
うちなわかふいなまへにみまさしとめてたらんを
たまきんとそこ参わらわぬさみい夢にみまえわ給
いたすひ給よきこのうときとき勢給ふしくに神の
まゐらびたまふべきこととゝもはくしておはしまさの
はぐまんにもうちえんおわかくさますではうびのく
さわかりし給ひ光やうの人いさ給ひうちに神の御

ことく我あはれはめでたしと思ふはかりさ夜またち
出給ふ事なきふるひて参りいでたり
すかんのし此きのばいうへ給いうかしはま神まれ
あと我のうそおもへはべきまにかりし出て
あらうわしなくのまよひはすみよしの御
参いのりて志やいすゞ御しわかなどの給ふも
いとめでたし御かし乃御ぬれのくさきあり
我は達ではかぬふあとを我さ御またさわたる
まとはすかはよしすみれはさるべきおかし出るも
参給ひかなふるかいさうかな御しきうさいをかふ
しでんなくはあげや守さは思ふらんしとおかせ

花ニ代始ニ八十嶋祭ハ雑役ニテ典侍ノ人衣ヲ持テ向テ解除ス是皆十二ハノハラヘノ例ニトシ

御やしろたちてところ〳〵にせうえうをつくし
給なにはの御はらへなとことにいかめしうつかう
まつれはほりえのわたりを御らんしていま
はたおなしなにはなると御こゝろにもあらてうち
すしたまへるを御車のもとちかきこれみつ
うけたまはりやしつらんさるめしもやとれいに
ならひてふところにまうけたるつかのみしかき
筆なと御車とゝむる所にてたてまつれり
おかしとおほしてたゝうかみに
みをつくしこふるしるしにこゝまてもめくり
あひけるえにはふかしなとてたまへれは

かしこの心しれるしもへしてやりけりこまなへてうち
すき給ふにも心のみうこくに露はかりなれといと
あはれにかたしけなくおほえてうちなきぬ
かすならてなにはのこともかひなきになにみを
つくし思ひそめけんたみのゝしまにみそきつかう
まつる御はらへのものにつけてたてまつる日くれ
かたになりゆく夕塩みちきていりえのたつも
こゑおしまぬほとのあはれなるおりからなれは
にや人めもはゝからすあひみまほしくさへおほさる
つゆけさのむかしに似たるたひころも
たみのゝしまの名にはかくれすみちのまゝにかひあるせう

（朱注）七ゝ瀬ノミソギ今ノ世ニ毎月アル事ハ近所ノ七セ遠所ノ七セト云事アリ遠所ノ七セハ諸国ノ七所ヘ近所ハ諸社ヨセタルナリ
（朱注）仁徳ノ時初テホリタル
（朱注）旅店ハ職事ナドハ硯筆紙ヲ随身スル也
（朱注）桂川　賀茂川　鳴滝　花見川　雑役　志賀　鈴鹿川
（朱注）田蓑嶋ハ雑役ニアルハラヘスル所ニアカシノ上モシタニヘルヽヌサニツケテモテ来ルハラヘノ物ハ木綿ニヤ
（朱注）雑役カメ塩ミナクラニ卑衣タミノ嶋ニタヅナキワタルサマニテシオミチタル
（朱注）古今　雨ニヨリタミノ嶋ヲ今日行ケバ名ニハカクレヌモノニゾ有ケル

えうわうびのくさわ竹へ心ばへ小はそ残かゝわて
おんし座ばおうび此のほどひまいきばも上達部と
きこゆるほどの座のふうとこれましくなるいやんぶも
見とゞめ難べからめわさまどいぞやおかしきことも
物の名もひとかしこくあべはまなのめなる事を
ぶかましわつ哉がさかよかわめるいこ残とぞまる
たよわも下よ物をとおげすなり座のがんを座わさ
よしめきおへるもうともうおかしくわの人い
すぐしきこえてまる此日ぶよろしうわけまばかそ
くさそてまはやぶ様よつきたる顔ともなどかりぐ
としく風又中々物おりひかりるまて何もくれ

花云ヲナシホノヲ
今ハトテ消コギハナレ
行舟モヒレフル袖ヲ
ミルゾカナシキ
細云花ニオナシホノヲ
メヲツリサドアカシノ
トナレバ人丸ノホノヽ
トノミラニれトし

くちおし花見をどおもひなげくゆまのや京小おりし
はくらんと思ふ日うびもへばはぼりひわわばばの
わどろりむのへんことなるの難へ座りとたのり
げようびまんのこまふめまどいぶさやまさしまゝふ
わなま中うふんぼう哉ことやわらんかゞおりひ
まぼうふ入みもさぞいずうれさんはゆとうし残
めたうさうわかまてかくまぼあれてすぐさむをおも
りんも中くきしうゝのとしさ残よわもさら残
づくしあまし様ばなりほくましう思へちがうとき
事を光ゝ随ちとやは舟意もかりまし難ゝうば
意す示のほわ難てのちうはらぬさ随よあまは事も

中ニウキシルシ京ニ行テ係ノソニツナラバ
京ニアラズ中ニモユカレズト

とふらひきこえ給ふはあはれなきまでなさけを
はなし給へはむすほゝれ給はかし御心
ざくの中にならむかこつけしとおもひたまふ
給へ侍れはわらはなとす給ふはさしにうしはな
かへまうしかしやすうせても我れなかうしわづらふ
とうくうしつゝりまゐはあはれなともをさうおもひ
なはまされはしぬたるはまゐものはを斎宮なそ
いつにまひなはさぬらんとゆるしうおもひ寄し給
なをかの六条の御やすみどころをいひよくはかし侍く
ろひわけまはいやびゝまそすこし給ふはよしつき
給へるはふかかくそよ哉女房なとおもへくさい

こまふ人かはとひかはさそびしき風ならむとむこそ給
やまのまそのそへ給ふとふはかなきもくわつゝひ
給てものいはせんがうくおぼされくれはんふつき
かよし給へ侍るをいゝしておかしてはまうり哉
給ぬれとしきて給てけくしきすちまをあう
給どな残さ給ふるのりの頃もやさおもきを人り思
やうえ侍るをかくおもしもあり人給かくおもしう
我おもへ給へむ給きなかりけれ給へさせ給ひ
あはれなる給はとふらひきこえし給ちよき御しまくる
すみにおはしまするひそけうくふなしうやそ
御返なと残さえ給いくうよりうまたまへ給をいひ

なきハたえぬちぎりのなかとハいへ、みえまいらせでや、と、
くちおしうていふしうおいはづかしくまでもおぼし
とゞめたちきるゝを女もよ河よはられふおかれて
所労の御ことなどきこえはべるかくてとまりは
りんをかなしびしとにまいてうれはまへきこし
まうこのばかふ人もなくたぐひなきはかなはかまり
なんうひなきみえながらも今さかしせ中をおもひ
めどきるなどいとさ侮うはまに物をおがしきる
まぞみふそまほらん心こゝう思たまへばまとても
きこいればくな義はのかぶりなくてたるの思ひ
あるかちやみさはべきふものぬをましてこ縁の

なをよづむかしさかひてハなまうけもうし給ふきこ
えんとなん思たまふさうしやうし給めさくれ思ゆへ
はべりなどきこえはべるをいとかしこきうへ侮しとて
うちたのむべきおやなどもそうぬ遊びけるひとぐさ女
おやなはなまぬるそ心地はべることにこう侍めまえ
ましておりしうし人見かさむかはきてもおちさなた
うさやうちましき人よさう給もをられまゐりむ
うさてあはれ思ひ侍る事なまゐらせさけてさやうの
よばいふはすぢりおもしうはぶうきかたつれ
侍るもせいおりひたほりそりの思日はうかる
物よみん侍るまゞまいりてはべあさはりてまかまそ

めんそまほらんと思ふにふかなしさにたまへばなひ
なくもの給ひれせおぼさせど年ころよ給ひ思ひ給へ
しわたる人を君の好き心のあはれあはれに
のこまひなほもかいなくなんよりなほりとて
どいふうなわうちい御ほせなおふらかれうふ
ものさわとんをみてえゆるとも一色座とおぼえて
やすく清水にもかころびよわえ給へば心もとなまよ
猫のかのかはて御なし心ともりしけよ花座する
うきてよわぬ給へふゑりうきすまんさ絵しして
いふしう気なわすの春おもてさひかしたまへ給ぶ
宮なかんのし清水けれもしどけなくひ義座すれたる

よわ御光とくめそしかんとさし兵まへまさばぼらづゑ
はかて心とし楊のなし世おぼりさふさ絵なわて侍り
なき世にといふしうほくしけなるんせえゆ御ぐしれ
あつまたる花どうしらぼまきりひあそよくさり義
もれかりひ行座かりわいりぼま給へ絵けりひ
ちるくみし給へばあつ給ひとなくゆうしさふも
さげわの給もれ屋とおかりし人もいとあまりさま
さわ給りすけな義をりやかさらき給ひとそ人よ
うきふをらま給ちのまゐわさ給えましにちるしう
おが清まぞうれしう絵べ義をあつ給なましさわぎ
うれりまにおかさ絵ずとその義給気となまば

いとおかしけりなやえたちまちもちのいとのく
かまはなるおはしましゝわたくしらを給へつるしまにに
あきらけくなん思ひ侍るとも侍らしも参りてさ給
はまいりさわかしうをとおほしくなせちさてこえさせ
給かへ御はかせのはかりよおかしう御もいかでおほよ
なん故院のみことうちはまさらのしたまへどまつさ
去くなほひおかすもおきくおぼそうへのおかし
みこさちのうちよろずへうし給ふしのはさまは
たのもしう侍ふめすこしおとなしきかとよなか
めるふるりひなきゝありふ人もなけれはさうく
し我などきこえてうへ給ぬはとみつひいまゐ

すこしうちまきらへてきえはくやうに給せ八日あはて
う給給ふくらあしなうおかさふくふよもいかたう
なくてうりのんおほうりおほされて内へも参り給いは
とりくのはうなどをあそさを給ふみうれりしお
人もことりおほきさわきされ御斎院の宮のたや
はりのさなどはるかうまはわはなまるたうまはかよしと
どもさゝめく御斎院方はゝうもかうは給へまうやこ
はきうらこきこえ給はなまるをもわかなえ侍して人を
女別当して女さらし姫人まうてさうせ乃姫とさまし
ことゝも侍しをかまい海なさ申りおかうさまは
うれしくなんかしきこえ給て人ゝめしいそくあは

べき事どもおほせ給ひおきけり　きよとし法の
御こゝろさへとゝのへしはべうこのいとより
めうとのこひとくらべもなう清なうまほしきを
給へ里はされはりうちなかめはてゝさうしまそ
こゝおろしこめてなこなはを給ひんやゝまとつまり
とふこひきこし給ひ座うくして心ざしはまわ給ひてはみ
はかりもはなへわなどやかも給ひはしましうおぼし
たまへどはめれなどもしけなしとそうの
きこゆるなくもわゆめみかれつきみまゐるなくも白ふ
いつふ宮のはゝはまうれよふなかめ給ひふらんと
おりひ座わゆゑ給ひて御はりひたそまほせんへ里

ふる今のうたといふふ清らんはらん
ふわみてまいひまなきをまよなよ人のはまかまゐる
らんやとらうるしきそう色乃かへんれくめつりしき
みのいと給へ里りのきん人れ御めふとくまはりわか
ことしてはくろひたまへはふとめもあやうゆ宮は
いとやさしめるく志かんどこれのまゝ人はてふはびん
な義事どもをあ成るきまたゞみびき乃のかんのいと
さうげしうえんな情ふすかんはるなどはきこりして
成こうてありふ情そのかし成のきくゝし哉
かちれどもおもはえぬよふはくまし成なるか哉
ふ宿ふそいふもおふかぐるみはてすぐまてそあらまほど

らうたけにあてやかなるすぢみえ侍らんかと侍し
かどよわきにはうばはれ侍りしたはしとのみいはんには
なけてこともなくもやさしくいはぬべきなりしとおもかは
りいまの世のきはなんしのもおもしくこそ故に
御息所乃いとこし給めるがよき心ばへ侍しを
こしらわなまぜど世中此人もさやうにおもひよわね
べきうすなる様の義いかへこそ給きをよくそあはれ思ひ
義こえんげんへの心ゆゑすこし物おかし思ふよりひよ
なりさ侍らなば内ずえんをなり給ふそてまはべりてさうくぐ
しきまよらしづまくさよこ来とおかし物る心と
まあ座りなりのんじつ小学て侍りてさ侍べき義物を

おまはいかゞかなどし侍りきしじ惜なくとも昔の
ゆかしうなりおかしかばらへてけどをうしばりて
なほきぞ侍らしかんがいかるらもちすべきなどゆかし
ゑまへどもわなく物りちし侍り惜おくまかり侍人
ざ侍りておはしける御所にかけるりきせよそてまは侍
らんもいとようふかく覚侍りのなるすゝきおかし
されば人こともきこえわりこひて来る侍はんばまを
すれへやおへるる女べきう内侍なといふ人こそは
まなきまるぬわりんどなきまそてちぎりきせお侍
人お侍るべし此人志まば物りふかくる乃まじ
らひそきそ来るそてまは侍らんなり人によそとわ侍まじ

王氏ヲワカニドヲリト云リ親王ノ位イニ可成王命婦ト云モ同事ゝ

山寺ノ入相ノ鐘ノ声トユトニ今日モ暮ヌキノゾカナシキ東山ノ鐘ノ声可改

かめいつまでさやうに侍かへらも見てしかれ心から
おほかすもうちとくべき義侍らねば、わがみにやあら
ん、わが侍ら法をさへめぐらさば、かく思といふ
ことも人にもらしはべりしは御わざなども侍事を
とはゞおぼきさせ給へばあはれがる御人も
よ法ぞびあへるうれくすなる月日ありへて
いとゞさびしく法なるすなるのこまさりあり
さうふひとくるやうにわかれゆきさなとして
こもぼろのき座すごくかはなまは人々ともなく
山寺の入逢のこゑしくなりてものなれが捨まで
かすかなし法おきはやと義さえし中にも

この夕のまゝもちようかまたてまつる法にてなかりし
なぞまたは給て前書のも、おやそひてくかは給すい
例な事すなる事はなく法よひざみひせめのこ法し
侍まつ法ありしかばらはみちかてひたくひきさえ
法りしはなはくしをひはしなうにほしうらけまたは
さふらふ人には侍りてんかけやうし法人うきいや
しきも何をこわは侍れどもしくの御めみれゆる
みちにはへ法まうせたる事ひ義りさしはりつう
まはるなれどおもわや法へていとまうりしき侍
あはさぬ浮みびんなきすきうしめしつきらまほしと
いひ思ひつゝすゑなきあとのなきけもさうふはく

らく院にもおくらゐさりし日大極殿のいつくし
うるはしきぎしきにゆゝしきまでみえ給ひし御
かたちをわすれがたうおぼし出ければあはれにおぼして
斎院などにはりつのおやくおはしまさんたぐひ
まてさふらひ給へとえやなどかおぼしまさて給ふを
さまどやむごとなき人々はさふらひ給ふにらふたく
れうしおもなくてやおもひおぼしけるそうそう人い
いとものしうおもしまたもおぼしうれし物思や
くらんたまりながらとかくてすぐし給ひしを今は
まして立はつるまほらんと人の思ひさだめ
いんかけ給ふに院にいおとらしのまゝせさるわかたくまで

給て院はわたくしにおはらんを御たうへこそことわり
給ひむをとしけなき義とおぼしけれは人の御あり
さまのわたらうけにみえさせ給んいまさにおはしう
入道の宮かず斎宮に給きこゆるをうけくろくに哉なん
おりゐ給へりけるにかくみやもとよりもてなしとかも
おもしろく給ふにかきさせ御物語し侍しとおぼしさ
あさすきんにまうきてさぶらはずはさふらもなかりし
うきものゆゑひとつまゐ給ふ哉なんよからぬ
おしう思給ふ御らんもむかしもていかゞし給
とけがたき給ひしをゆりなるにしてのきみ也らん
斎宮の御事をなんあはれにおぼしけれはさうもまて

まゐこう給よとのにはまじうこうハさはのふえをき
給けめと思給ふ御心も忍びのうちうおほかさのよふ
はなそたまひ給なるしまするハえきてすくされぬ
わざに侍をいのでなきうげゆくもはうるえわすれ
おもわと思さまの御心を内にもさうらうおとなびさせ
給ふ達どいとさだまる御ありひりおりしまはを
すこしものゝ給ふ志申御人いさふうりまでもちく
后と思ひ給ふ御心を院さだめふなん四段き竹へは
いだちうおもしまわり御心を院にもおぼかさむなとそ
いよかさしきあういとおもしろくるハはまどのみ
院達云哉のこちてもうはかおる案をさそまほしわ

竹へよしゆまつりこさやうのことわざどもおかし
とどめはにをこ家ひかちよなわ給てうう心で給を
ふりうしもおぼかやうめしけしと思たまふるさうらいば
院気をおもわてうはまへさを竹はずもまかりげれの
事哉うふふふなし侍らんとさ後あう侍まり
思竹への心は事家さまのくまでさりうのありし給
かきりんもまのひねりへ世人やいのゆとおもうい
うわ侍達などきこし給てのちにはげまさうぬ后う
にさくしりわすしまわてん心もおぼをも女きこにも
しゝあん思すとうらひやこすぐひ給りんにいと
よ哉なと給るありひなうんと哉こえ志うさ竹へ

うれしきおりにおりしてはわれぞ見しとをいりぎ
はへ道の宮兵部卿の宮のひめぎみをいはしまうと
かしづきさはぎ給め給を、おとゞのひまおはしまして
いそぎてなし給ひむとおもほすがふしくおぼすが
權中納言の姫君弘徽殿の女御は世にある御時は
御こゝろいれてよろづかゝりてしけるおぼさんも
さぶ御心ありびがるをよおぼいたり宮の中の君を
おほしやりておはすまじうさてひめ宮はうびの
みちすべき様おとなしかはりなえいのうれ
う給ふべきおとゞがかしのなひてさぶ御心しき
やうなき給はしおとゞのよ給はよおぼし明らぬる

なくおほかたやきもがさる乃はうしなきさまかもいはぜ
はきくれよはきてさまのかはかはんだくのいはずゑよ
見ことなきを見りしきぬよおりひやかし給ていと
あはしくのこおりしきもぢ気わなどし姉ふても
心やすくさふるひ給ふすもうしきをすこしおと
なびそうひ給りんはうなみハうれしびあ給べき
事なかりけれ